

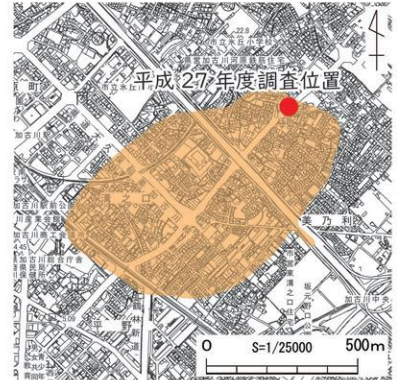
# 令和3年度企画展解説シート

## 「発掘された加古川～近年発掘された加古川市の遺跡～」

みぞのくち

### 溝之口遺跡（平成 27（2015）年度調査）

溝之口遺跡は、加古川町溝之口・美乃利に広がる弥生時代から中世にかけて営まれた集落遺跡です。昭和 42 年に加古川バイパス建設工事中に発見されて以降、兵庫県教育委員会や加古川市教育委員会によって発掘調査が行われており、弥生時代の竪穴建物や周溝墓、古墳時代の竪穴建物、奈良・平安時代の掘立柱建物など、多数の遺構が確認されています。



遺跡範囲

今回展示している資料は、平成 27 年度の発掘調査で溝からまよって出土した弥生時代中期後半頃（約 2100 年前）の弥生土器です。これらの弥生土器は完形のものも多く、なかには器壁の一部にわざと穴をあけたと考えられる土器もあります。このような特徴は、当時のお墓に供えられた土器（きょうけんどき 供献土器）によくみられます。

弥生土器が出土した溝は、新しい時代に掘られた溝によってその大部分が失われており、また、調査で検出できた範囲もその一部であったため、この遺構の全体形についてはわかりません。しかし、前述した特徴をもつ土器が多数出土していることから、この溝は周溝墓の一部である可能性があります。また、この溝が周溝墓であるとする、これまで溝之口遺跡で確認されている周溝墓のなかで最も北側に位置することになり、当該地が溝之口遺跡における墓域の北端付近にあたる可能性が考えられます。

#### 〔用語解説〕

周溝墓…弥生時代における墓制の1つ。溝によって方形ないし円形に区画し、そのなかに埋葬施設を設けた墳墓で、弥生時代の東部瀬戸内から関東にかけて盛行した。



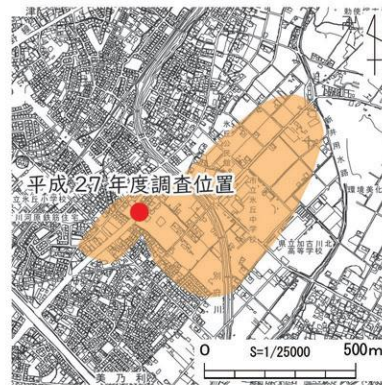
溝のなかの土器出土状況



溝から出土した弥生土器

## 美乃利遺跡（平成 27（2015）年度調査）

美乃利遺跡は、加古川町美乃利・大野に広がる弥生時代から中世にかけて営まれた集落遺跡で、すぐ南西側には前述の溝之口遺跡が存在しています。平成2～3・9年度に兵庫県教育委員会によって発掘調査が実施され、弥生時代の竪穴建物、掘立柱建物や水田跡、奈良時代の掘立柱建物や溝、平安時代の掘立柱建物、井戸や畠跡など、各時代の様々な遺構が確認されています。



遺跡範囲

今回の展示では、平成 27 年度に加古川市教育委員会が実施した発掘調査において、竪穴建物と土坑から出土した弥生土器などを展示しています。

平成 27 年度の調査では、弥生時代終末期頃（約 1800 年前）の竪穴建物が計4棟検出されました。なかでも、床面中央にしっかりとした構造をもつ炉跡が確認された平面六角形の大型の竪穴建物では、他地域から搬入された土器、また他地域の影響を受けた土器とともに、敲打石や台石、砥石といった石器類が出土しました。また、石器のなかには何らかの鋭利な「もの」を研いだ痕跡が残っているものがあり、さらには炉内の土から微小な鉄片も採取されていることから、この竪穴建物では鉄器をつくっていた可能性があります。

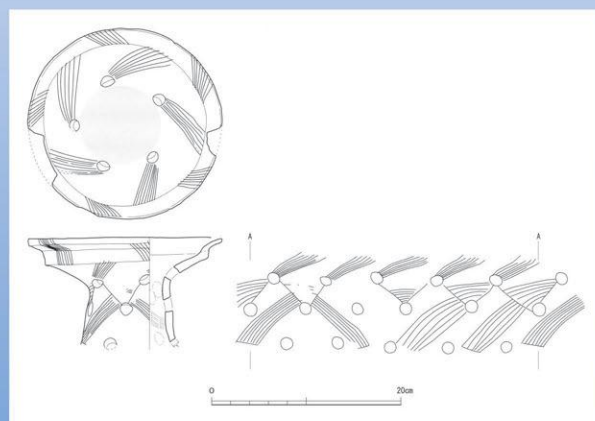


平面六角形の大型竪穴建物

このほか、昔の人が掘った穴（土坑）から出土したもののなかに、珍しい文様をもつ弥生土器がありました。この土器は、壺などをのせるための台で、器台と呼ばれています。土器外面に6～9本の線を1つの単位とした文様を幾何学的に入れてあります。現在のところ、ほかに類例が知られておらず、何らかの祭祀に使用されたものである可能性が考えられます。



炉内の土から出土した微小鉄片



土坑から出土した装飾器台

## 上村池遺跡（平成 28（2016）・29（2017）年度調査）

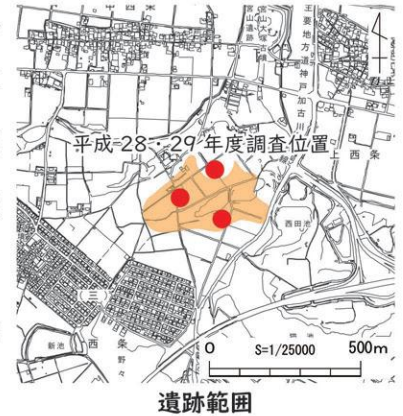
上村池遺跡は、八幡町上西条に所在する集落遺跡です。これまで古窯跡として認識されてきた遺跡ですが、平成 28・29 年に実施した発掘調査で集落的な性格をもつ遺跡であることが新たにわかりました。調査の結果、飛鳥・奈良・平安・鎌倉時代の掘立柱建物や溝、鎌倉時代の木棺墓などが確認されました。

今回の展示では、掘立柱建物や溝、木棺墓から出土した土師器や須恵器、磁器などの展示を行っています。

複数棟検出されている掘立柱建物のなかに、桁行6間、梁行2間以上の大型の建物が確認されました。奈良時代（約 1300 年前）の掘立柱建物とみられ、同時代の一般的な集落ではみられない規模の建物であることから、その造営背景を含め注目されます。出土遺物はそれほど多くありませんが、土師器や須恵器、瓦、鉄器などが出土しています。

複数確認されている溝のうち、幅の広い溝からおもに平安時代末頃（約 850 年前）から鎌倉時代（約 800 年前）にかけての遺物が比較的まとまって出土しました。出土遺物には、土師器や須恵器、中国産の白磁といった土器類や瓦などがあります。

鎌倉時代の木棺墓については、1基のみの検出でした。長辺約 1.7m、短辺約 0.9mの長方形の穴に木棺を納めていたとみられ、土師器や須恵器、青磁、鉄器が出土しました。なかでも、土師器小皿とともにほぼ原位置を保ったまま出土した青磁碗は、龍泉窯系青磁と呼ばれる中国産の舶載磁器で、被葬者が地域の有力者であったことを示しています。



遺跡範囲



上空から眺めた上村池遺跡



大型掘立柱建物

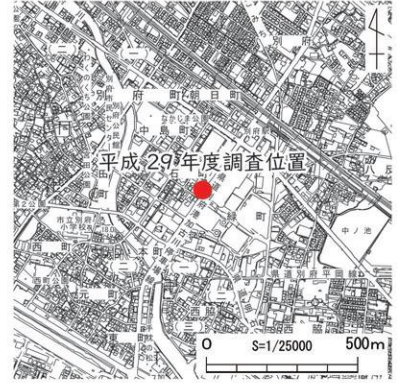


木棺墓

## 石町中世墓（平成 29（2017）年度調査）

石町中世墓は、平成 29 年度に別府町石町で新たに発見された平安時代後期（約 900 年前）から南北朝時代（約 650 年前）にかけて営まれた<sup>こぼ</sup>古<sup>こぼ</sup>墓です。

調査面積は 90 m<sup>2</sup>と狭かったですが、調査した範囲のほぼ全域から多様な埋葬遺構が検出されました。その一部を紹介すると、石敷きの溝で区画した土坑に<sup>ぞうこつき</sup>蔵骨器などを納めたもの、土坑に蔵骨器を納めたもの、土坑に火葬した骨を納めたものなどがあります。



遺跡範囲

石敷きの溝で区画した土坑に蔵骨器などを納めたもののなかには、須恵器壺を蔵骨器として用い、土坑のなかに並べるようにして埋納したものがありません。また、これらの蔵骨器のほか、まとまった状態の火葬骨が同じ土坑内で検出されました。その構造や出土遺物、周辺埋葬遺構との配置関係などから石町中世墓のなかでも中心となる埋葬遺構と考えられます。

土坑に蔵骨器を納めたもののなかの1つに、大型の須恵器甕<sup>かめ</sup>を蔵骨器として使用し、甕の中<sup>せんぶつ</sup>から<sup>せんぶつ</sup>塼仏が出土したものがありません。甕の上半部が削平によって失われていたため、塼仏も原位置を留めていないと推測され、どのように使用されたものか詳細はわかりません。しかし、加



石敷きによって区画された区画墓

古川市内で塼仏が出土したのは今回がはじめてで、さらに古墓という性格の遺跡から出土した事例として注目できる資料です。

また、発掘調査後に行った追加調査で、土師器杯・鍋・羽釜、須恵器椀などの<sup>きょうぜんぐ</sup>供膳具や<sup>しゃぶつぐ</sup>煮沸具がまとまって出土した土坑1基が確認されました。葬送時もしくは葬送後の祭祀で使用した土器類を廃棄したものと考えられます。

今回の展示では、各埋葬遺構から出土した須恵器や塼仏のほか、追加調査で出土した土師器と須恵器を展示しています。

〔用語解説〕

蔵骨器…火葬などした死者の骨を納める容器。

塼仏…粘土板の表面に半肉彫りで仏像を表現したもの。



塼仏が出土した蔵骨器

令和3年度企画展解説シート  
「発掘された加古川～近年発掘された加古川市の遺跡～」

令和3（2021）年7月24日

編集・発行 加古川市教育委員会文化財調査研究センター